

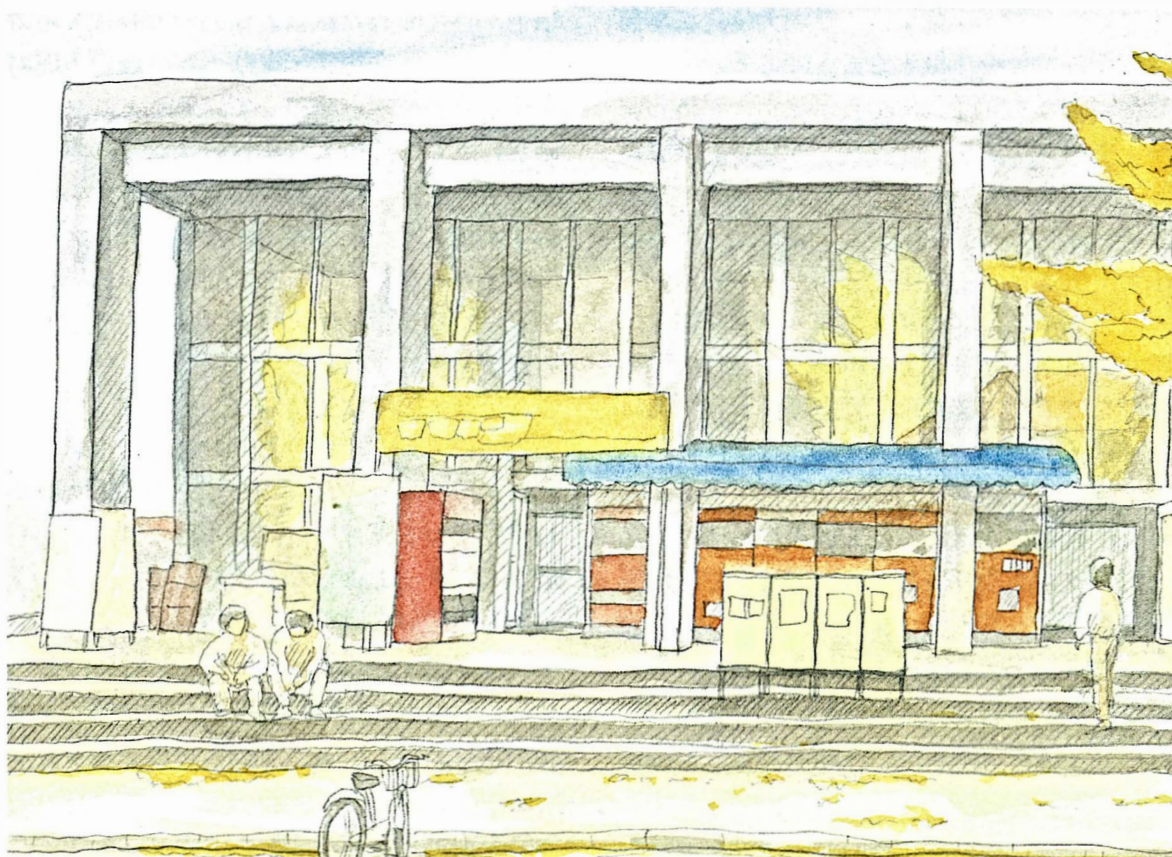
学園ニュース

富山大学

NO. 62

編集 学園ニュース編集委員会 発行 富山大学

昭和 63 年 12 月 10 日



学内風景（その26）生協前・秋の風景 小林 郁美

~~~~~ 目 次 ~~~~~

経済学部の学生諸君へ	経済学部長 吉原 節夫	2
新任教官及びあいさつ		3
三元系希土類金属間化合物の磁性	教育学部助教授 清水 建次	4
留学雑感	外国人留学生（工学部） 呉 可揚	6
学部だより（教育学部・工学部）		7
学生部だより		13

◇◆◇経済学部の学生諸君へ◆◆◇

経済学部長 吉原 節夫



年度途中の9月30日から経済学部長の職に就いているが、経済学部の学生全員に話しかける機会がないので、本誌を通じて私が今諸君に対して最も強調したいと思っていることを述べることにする。

第1は、富山大学経済学部の実像をつかみ虚像を払拭することである。

わが学部の中味＝実像は、諸君が見た入試情報誌のランキングに連なるものでは決してない。学部長に就任して日なお浅く、私は国立11大学経済・経営学部長会議に出席した。小樽商大・福島大・横浜国大・富山大・滋賀大・和歌山大・山口大・香川大・長崎大・大分大の10大学の経済学部・経営学部は、旧制「官立高商」の後身学部なので、この10大学の学部長会議を開催してきた。「官立高商」は、他に東京高商（一橋大）・神戸高商（神戸大）・名古屋高商（名古屋大）を加え「13高商」として天下に知られ、多くの優秀な人材を輩出し世人はいずれも名門校としてこれを高く評価してきたのである。埼玉大学経済学部のたつての加入希望により11大学の会議となり、他に信州大学経済学部長がオブザーバーとして出席した。諸君は、この学部長会議の話から、わが富大経済学部が全国のなかに置かれている地位を知ることができるであろう。

上述の名門経済学部の大半は、入試環境の変化によって偏差値による全国ランキングではその位置を下げている。そこから進学希望者に映るイメージは虚像でしかない。諸君はまずもって、歴史と伝統に輝く富大経済学部の学生であることを自覚し、自信をもって活気ある学生ライフを送ってほしい。

第2は、人生の最大の成長期にあることを認識し、積極的に補強の努力をすることである。

大学キャンパスは、レジャーランド化したものが多くなり、マンガが横行し、学生はブランド志向になっている。これを是認する“評論家”もいる。私は、何にでも関心や興味をもつタイプなので、新聞・テレビ・雑誌等でこのような全体的傾向を見聞した

り、読んだりしており、皮相な判断はしない積りでいるが、それでも「それでは惜しいではないか」と警告したい。教師の責務としてそのことを痛感している。大学時代ほど、全人格の形成の上で高度成長する時期は他に存在しない。そして、諸君の多くは、この時期に自らを補強すべきウィークポイントをかなりもっているからである。日頃感じていることを、以下、与えられた紙教の範囲内で挙げてみよう。

a) 暗記から思索・考察へ。 今の入試対策が思索よりも暗記へと誘導していることは否定できない。諸君の多くもそのように育成されて、専門課程の学生でも「思索」の姿勢が足りない。マンガでなく難解な学術文献と取り組み、その理解に努める。複数の学説の存在を知り、それぞれの論旨を正確に把握する。対立する見解につき、論理的矛盾がないかを考察する。いずれが妥当な結果をもたらすかを、できるだけ広範囲な視角から、そして、できるだけ長期的展望のもとに自分の頭で考えてみる。頭脳はそれによって鍛練され良くなり、応用能力が強くなる。暗記しているだけでは、変化球に弱くて頼りにならないバッターのようなものである。

b) 幅広い人間性を。 諸君が専攻するのは経済学・経営学・商学・法学といった社会科学であるがその研究対象となる社会ないし社会関係は様々な人間が作り上げているところに特徴がある。このことを忘れてはならない。そして、諸君が卒業後に仕事をするのも結局は人間の中であり、多様な人間模様に組み込まれるわけである。小さい時から個室をあてがわれ、家庭では受験生として特別待遇、学校ではクラスメートと交流する時間を少なくする方が偏差値が上がる、気の合う友達とだけ会話をすればよい—という生活は、卒業して社会人になると同時に叩きのめされる。そのときに簡単に潰されないためにも、幅広く人間考察をし、自分と異った思想や性格の人間と対話をして自己の人間性を広げるよう積極的・活動的な日々を送ってほしい。

知性をもったバイタリティと野性味を!!

今回は、この辺で止めておくことにしよう。

* * * 新任教官 * * *

- 長谷川 隆 講師（経済学部） 63.10.1
昭63・3 東京大学大学院法学政治学研究科
博士課程単位取得退学
担当：民事法
- 佐藤 清人 助教授（教養部） 63.10.1
昭63・3 東北大学大学院文学研究科
博士後期課程単位取得退学
担当：英語

▽▲▽新任のごあいさつ▽▲▽

経済学部講師 長谷川 隆



10月1日より経済学部経営法学科の専任講師となりました。どうぞよろしく願いいたします。

私は、大学院の前半部分までの学生生活を金沢で送りましたので、北陸の気候、風土については多少知るところがあります。大学院の後期を過ごした東京からこちらへ参りますと、あの「やわらかな空気」が待っており、懐かしさを覚えたものです。

私の専攻は民法学で、現在は、債権法と物権法の境界領域に属する問題につき研究を進めております。

まずは財産法の講義を担当することになりましたが、ささやかな社会経験なども生かしつつ（大学院に入る前に約5年間、民間の銀行に勤務しておりました）、微力を尽くしたいと存じます。

現在の私にとって、大学学部の構成員の一人として日々を送ることは、自らの非力を痛感することと同義であるというほかありません。皆様方のご教導を切にお願い申し上げます。



◆ × ◆ 着任の御挨拶 ◆ × ◆

教養部助教授 佐藤 清人



10月1日付で、岐阜大学教養部から本学教養部（担当科目は英語）に転任いたしました。

わたしの郷里は隣りの新潟県で、高校卒業時まで郷里で過ごしました。その後、大学・大学院の学生時代を山形・仙

台と東北地方で送り、60年4月から本年9月までの3年半の間岐阜大学に在籍いたしました。

高校卒業以来10数年の間、日本海の海から離れた土地で暮らしてきましたので、富山にまいりまして、久しぶりに故郷に戻ってきたかのような印象をもちました。他の土地から富山に移って来られる方が多くが懸念される冬の寒さと積雪も、わたしにとってはむしろ親しく、懐かしいものであり、心成しか気分和む日々を過ごす昨今です。

一方、本学では前に勤務しておりました岐阜大学

と同じ国立大学であり、また、わたしの担当する授業も教養課程の英語ということで、以前と何ら変わりはありませんが、キャンパス内の環境には、やはりさまざまな面で相違があり、現在は、3年半前はじめて大学の教壇に立った時と同じような緊張感と戸惑いを味わっています。しかしながら、全体的にはむしろのんびりとした自由な雰囲気があり、今後わたしにとっては、居心地の好い環境になりそうな予感がしています。

ところで、わたしは19世紀ヴィクトリア朝の英文学を専門に研究しています。普通の英語の授業では、英文学それ自体について講義をすることはありませんが、時には専門分野の知識も授業に織り混ぜて行きたいと思います。自らの研究を発展させると共に、学生諸君の文学的関心に応えられることを希望しています。

最後に、学生諸君の協力と、諸先生並びに事務官の皆様のお指導、御鞭撻をお願いいたします。

◎◎◎ 特定研究 三元系希土類金属間化合物の磁性 ○◎◎

教育学部助教授 清水 建次



物質は多数の原子からできており、その原子は電子と原子核から成っている。電子や原子核はスピン磁気モーメントを持っているため、すべての物質は何らかの形で磁場に反応する。その仕方は物質の電子状態と密接なつながりがあり、例えば強磁性体と呼ばれる物質は、ある温度以下で磁氣的秩序状態へ移転し磁石に引き寄せられるようになる。磁性の研究とは簡単に言えば、物質が磁場に対してどのように反応するのか、また、その理由は何かを明らかにすることであろう。磁性研究の対象となる物質には、普通、鉄・ニッケル・コバルト等の3d遷移金属元素、ガドリニウム・テ

レビウム等の希土類金属元素が含まれる。

さて、二種類以上の金属を溶かし合わせて冷却した後では、①互いに原子レベルで混じり合った固溶体ができる場合、②全く混じり合わず、もとの金属のままにいる場合、③ある成分比の化合物ができる場合、の三通りがある。通常、第三の化合物を金属間化合物と呼んでいる。これに属する種類は非常に多く、中には最初の成分としての〔金属-非金属〕の組合せも含まれる。二成分から成るものを二元系、三成分から成るものを三元系金属間化合物と呼んでいる。このような金属間化合物の結晶学的性質は化合前の金属単体のそれとは随分異なり、磁氣的性質も複雑に変化することが知られている。例えば、金属間化合物GdMn₂中のMn（マンガン）は約2ボーア マグネトンの大きさの磁気モーメントを持っているが、ErMn₂中では消失してしまう。両者の化合物での電子状態の変化が磁気モーメントの変化と

してあらわれてくるのである。

磁性の実験方法としてはいろいろなものがあるが、最も一般的な方法は磁化の大きさを測る磁化測定であろう。磁気モーメントの大きさや磁化容易軸を決めることができる。また、微視的な方法としては、核磁気共鳴（NMR）法がある。磁性体に限らず原子核は物質の微視的な性質を知る上で良いプローブになる。金属合金中の原子核の見る磁場の大きさは、同種の原子核であっても合金の種類が違えば異なるのが普通である。また、共鳴状態では原子核スピン系の受けとる電磁波エネルギーは伝導電子等を媒介として格子系へ逃げて行く。この現象を核磁気緩和と呼んでいるが、この緩和過程を調べることにより、その物質の電子状態に関する情報が得られる。このように核磁気共鳴信号を解析することにより、原子核の置かれている環境を知ることができるのであり、核磁気共鳴信号はこの意味で、物質中の原子核からの「手紙」に喩えることができる。しかもNMR測定には、比較的小規模な研究室でも実験が行えるという利点がある。

1970年代に入って、希土類を含む三元系金属間化合物のうち、磁気秩序を示すと同時に超伝導をも示す、いわゆる“磁性超伝導体”に関して、理論と実験とがともに注目されるようになった。現在、巷間を賑わせている酸化物超伝導体もその超伝導発生メカニズムに磁性が強く関与していると考えられている。本来、超伝導と磁性は相反する事柄であり、超伝導体に不純物として少量の磁性金属を混ぜると、超伝導が破れたり、転移温度が急激に低下したりする。この点で磁性超伝導体とは興味ある物質なのである。

希土類を含む三元系金属間化合物に我々が興味を抱き研究対象とした理由は、①磁性超伝導体として新しい化合物を発見できないか、さらに、②そのような化合物において主として磁性を担うと推測され

る4f電子に対する結晶場の影響あるいは磁気構造はどのようなものか、という点について磁化測定等の巨視的な実験方法のみならず、NMRという微視的方法によっても詳しく調べたいと思ったことにある。よく知られているように、希土類金属元素の4f電子は5s5p電子の完全殻の内側にあるため、3d遷移金属と異なって結晶場による軌道角運動量の消失が起きない。このため希土類原子核の位置では軌道磁気モーメントによる数メガガウスもの大きな磁場が生じる。つまり、希土類金属のNMRには非常に高い周波数領域のNMR装置が必要になる。さらに、磁性超伝導体の磁氣的転移温度や超伝導転移温度は一般に低く、試料の温度を液体ヘリウム(4.2K)あるいはそれ以下の極低温下にしなければならぬ。我々がこれまでに磁化測定を行なった、超伝導を示さない化合物 RRh_2Si_2 (R=磁性希土類金属元素)も、この例に漏れず、その磁氣的転移温度が非常に低い。そこで我々の研究室では、低温物理学を御専門とする永野教授を中心に、温度を下げるため液体ヘリウム3を用いたクライオスタットを製作中であり、現在、組立て・取付けの段階にきている。このクライオスタットによって0.5Kまでの極低温下における磁化測定・電気抵抗測定・NMR測定が可能になり、種々の新しいデータが得られるものと期待している。なお、これらの研究には、物理学を専攻する当研究室所属の4年次生も特別研究の形で参加し、研究を手伝っている。

始めにも述べたように、希土類を含む化合物には非常に多くの種類があり、その中には、希土類-鉄-ボロン系の強力な永久磁石あるいは酸化物超伝導体といった、その物性についての基礎的・応用的究明がともに重要視されている物質が含まれている。

本研究で得られる結果を基礎にして、研究をさらに発展させたいと願っている。

▼◇▲ 留 学 雑 感 ▲◇▼

外国人留学生（工学部） 吳 可 揚（マレーシア）



最近、この原稿に追われて、過去の三年間のことを思い浮かべてきました。いろいろな苦勞や、くやしい思いと楽しい思い出を重ねてきて、私にとっては貴重な経験となっています。

私は日本に来たのは三年前で、ちょうど十九でした。今思い出すと、父母が子共の気持ちを理解してくれ、私は感謝しています。一番忘れられないのは、始めて父母から手紙がきた時の気分です。なんだか、悲しい気持ちになって、涙が流れてきました。そういう気持ちは言葉では表現できません。往復のキップを持っているので、いつでも帰れると自分で自分を慰めながら、三年が終わってしまいました。一度も帰国しませんでした。キップの期限がきれて、あのまま残っています。時間の経つと共にホームシックが消えていきました。毎年この時期に、「正月に本国へ帰らないの?」「いやーまだ分からない、たぶん年末帰ると思う。」「寂しいでしょう。」とよく友達とこういう会話があります。今考えてみたら、私が寂しいというよりも、父母の側に誰もいなくて、可哀想です。父母と三年間以上も離れていて、確かに会いたい気持ちがあります。ただ、この三年間に自分が大した変わりもありませんので、帰ったら恥しいのです。ですから、いつ帰るとの予定はありませんが、そのかわりに、勉強などを頑張っています。いつか帰国して、「立派になったなー!」と父母に言われたらどんなに喜ぶことでしょう。

東京にいた一年半の生活経験を通して、人間関係に対する認識も、更に深まって、自分自身もまた成長していったような気がしました。振り返って見ると、日本に来た時に、友達がいなくて、言葉もできませんでした。特に習慣が違うので、いろいろな悩みがありました。今考えたら、よく耐えてきたと自分さえ信じられません。あの時、長沼日本語学校で、一日に僅か三時間の勉強で、先生が日本語と日本の習慣を教えてくださいました。十人以下のクラスにドイツ人、オーストラリア人、アメリカ人、韓国人と中

国人がいて、皆ほんの少しの日本語で心を通じて、最も楽しい学校生活を過ごせました。やがて、皆それぞれの国へ帰って、日本語で書いた手紙が来て、私は感動しました。

富山に来たのは海と山に魅せられたのです。この気候、習慣について、何も知らずに、地図を開いて、富山を選びました。それについて、面白い話があります。日本語学校の同じクラスにいた一人の留学生が、私より一年前学校を出て、地方の大学へ行きました。あの時、聞いたこともない所なので、私は「あんな田舎へ行くの、私だったら絶対に行かないよ。」と嘲笑していました。あれから一年間経って、私は富山に来て、偶然彼に会いました。彼は現在医科薬科大学で勉強しています。思い出したら、恥しいです。

私は一年程東京で生活して、すぐ飽きました。朝は学校で夜はアルバイトで、他の時間は遊びという意味ない生活でした。勉強より遊びの方に私が魅せられていました。そうだったら、日本に来た意味が無くなるのではないかと急に悟りました。これは地方にきた原因とは言えます。特に富山を選んで、良かったと思います。ちっとも伝統的なものが残っていない東京と比べると、富山の方がずっと沢山な勉強ができます。而も、田舎の人が優しくて、よく富山弁で話をかけられて、分からなくても、心地がいいです。人間関係に対する警戒心もなくなりました。やはり勉強なら、富山が一番良いと、私は認めます。

富山に来てから、全く新しい生活が始まりました。自分の新たな生活環境を造るのに、最も必要なのは友達だと思って、すぐバドミントン部に入って、皆と厳しい練習を受けていました。一年以上も運動をしていなかった私は、とても体力がついて行けません。最初のランニングの途中で両足がつりました。私に対して先輩たちが優しいですが、習慣と言葉表現が違うので、よく怒られて、申し訳ないと思っています。良い先輩ばかりなので、懐かしいです。時間の関係で、フォークソング愛好会に移りました。音楽が好きな私は、皆のおかげで、日本の歌を沢山知って、ギターも一層上達しました。

このように日本人の中へ、とけこもうとしていま

したが、なかなか受け入れられません。親しい友達と言ってもやはり外国人が多いです。それは残念なことです。私には不可解なこととなっていて、もちろん、他の外国人も同じことで悩んでいます。それは何故でしょう。

今専門課程に入ったばかりなので、急激に言葉と内容がかわって、分からなくて、少し慌てています。これから人一倍の努力をして頑張りたいと思います。指導教官とクラスの人に迷惑をかけるかもしれませんが、よろしくお願いします。

XX XX 学部だより XX XX

◆ 教育学部

◆ ◆ ◆ 教育実習を終えて ◆ ◆ ◆

附属養護学校教官 実習部主任 藤嶋桂子

本校の63年度の教育実習は、前期（9月5日から9月26日午前まで。基礎免許実習2単位）と後期（9月26日午後から10月15日まで。養護免許実習2単位）の合計6週間、昨年同様に実施された。養護学校教員養成課程の20名はノンストップで6週間を、他の教員養成課程の選択生10名は後期より加わり、総勢30名というかつてない多人数の実習となった。養護学校教員養成課程の学生20名は6週間連続して行うので、心身共にオーバーヒートしがちで、実習部としては第一に実習生の健康を心配していたが、まずは特別の事故も無く終了し、「ホッ！」と一安心という所である。

私自信も本校（本校の前身である特殊学級）で実習を行った者であるが、当時は3年次と4年次を別々に分けて行い、期間も今よりずっと短かったように思う。又、3年次の実習時に本校へ初めて訪れて障害児と対面し、困惑したり戸惑ったりしたものであった。しかし、現在は昔とは雲泥の差があり、教育実習生にとって至れり尽せりという感じがする。それは、教育実習前に本校を訪れる機会を大学側でしっかり確保していること、又、来校するだけでなく、実際に本校の児童生徒に触れ合う機会もあること（3年次の診断実習、4年次の観察参加等）及びその該当学年以前の学生でも、大学教官と連れだつて見学する機会に恵まれていること等に見出される。大学の講義の関係上、日程がうまくかみ合わず、十分観察できなかったということも一部には聞かれたが、児童生徒に直接関わる機会が設定されているのだから、遠慮する事なく訪れ、この機会を十分に活

用してもらいたいと思う。又、実習前には事前指導講話も開かれ、大学の教官の他に本校の教官も大学へ赴き、直接実習生に話をする機会もある。これは13年前には考えられない事であった。さらに養護学校教員養成課程の学生が他の小・中学校の免許取得の為に他校へ実習に行く事は当時多かったのに対し、逆に他の教員養成課程の学生が本校へ実習に来るということはほとんどなかったが、今年10名の選択生があった。このことは（本校としてはその受け入れが大変であったが）障害児に対する理解が広まっているものと思われ、嬉しくもあった。10年程前の養護学校義務化、及び国際障害者年や障害者のイベントのマスコミ効果等で一般社会の障害者に対する認識・理解が深まってきている現れではないかと思われる。

しかし、実習の実際については昔も今も変わらぬ事が多い。本校児童生徒の理解に始まり、単元・題材の設定から教材の研究に次ぐ研究まで。個人差に応じた指導それ自体は教育の本質であり、いつの時代も教室の根幹をなすものであるが、特に本校では一斉に使用する教科書もなく、児童生徒の反応を予測しながらの指導案の立案に思いを潜めることになる。障害の程度も次第に重くなってきており、一人の教師で行う授業から複数の教師による指導へ比重が移っている。そのため、チームティーチングや事前打ち合わせ、事後反省が欠かせない。このように時間がどれだけあっても足りず退勤時刻を過ぎてしまうことも、昔と変わらぬことの一つである。

つい先日、NHKテレビは特集「世界の中の日本・

教育は変えられるか・いま教師は何を求められているか」を組み、世界各国の教育の実情、教員の資質の向上について厳しい状況報告を行った。海外では、教員に採用されてからもテストや評価が繰り返され、その結果によっては再び大学へ戻される実例もあり、日本も今後どのように変わるのかとつい思いをめぐらせたりした。教員採用一次試験の結果が出ているので、この実習が辛いものとなった学生もあった

ろうと思われるが、次回のチャレンジに大いに期待したいものである。他に一般企業への就職予定の学生も数名いたようであり、又教職につこうかどうかどうしようかと迷っていて、今回の実習で結論を出そうと心に決め臨んだ学生もいた。いずれにしろ、この実習でのがんばりを糧として、ぜひとも今後にも生かして行ってほしいものと、どの学生に対しても願う次第である。

◀◇▶ 教育実習を終えて ▶◇▶

教育学部4年 平瀬 真由美

教育実習が終わった。昨年は、学部附属幼稚園で四歳児、今年は富山市立愛宕幼稚園で五歳児、そして高岡市立定塚小学校で一年生を、それぞれ15.5日間担当し、充実した日々をすごした。

昨年の実習は、初めて幼児とじかに接し、無我夢中で格闘するうちに過ぎ去ってしまったような気がする。お面ひとつでそのものになり切ることのできる、まるで別世界の住人のような子どもたちの、伸びよう伸びようとする生命感と瑞々しい感性に、終始圧倒される毎日だった。彼等はいつも、その時その時に一生懸命だ。何をやるにも手抜きやごまかしがないことが驚きでもあった。まだうまく操ることのできない言葉を、ひねり出すようにして私に精一杯話しかけてくる。しかし、話が自分中心である上に幼児語も残っているので、要領を得ないことも多くあった。その度に十分な答えができないことを、子どもも私自身ももどかしく思い、子どもの気持ちを傷つけたのではないかと心配したりした。しばらくたってからふと“さっきの〇〇ちゃんの話は、こんなことを言いたかったのか”と思いあたり近づいてみるが、子どもはその時にはもう他のことに夢中で、気持ちを通じ合わせることができない。幼児にとっては現在こそが大切なのだ、という事実をはっきりと認識させられた出来事だった。後ろからいきなり抱きついてきた時、目と目が合った時、そういった接触の機会を逃さないように、そして少しでも多くのものを汲み取ってやれるようになりたいものだと実感した。

幼児にとっては“遊び”こそが、言葉の発達など

知的な成長を促し、運動能力を高め、あるいは、友達づきあいや規則を守ることなどの社会性を身につけさせていく。このことは講義でも学び、知識的に分かっていたつもりだが、実際に、実習中にも遊びを次々に展開させ、遊び込んでいく姿を随所に見ることができた。幼児は、興味や関心をもったことには熱中し取り組むが、そうでないものにはそっぽを向いてしまう。そのため、一斉保育の際に集中して遊び込ませていくには、導入の段階で子どもを引きつけることが必要である。昨年の実習では、この「かかり」の重要性を痛感させられた。そこで今年は、教材作りや指導案作成といった事前の準備に力を注ぎ、余裕をもって臨もうと努力した。しかし今、振り返ってみれば、確かに手作り紙芝居やペーパーアートは好評であったが、子どもをまとめやすい無難な活動を取り上げがちだったように思う。子どもが現在あるところの並行遊びから集団遊びへ移行させるといった発達段階に配慮した指導や、身体を動かすことが特に好きなクラスではその特性をもっと理解して活動を組織するといった実態に即した指導に心がけていれば、遊びもさらに深まったのではないかと反省される。

この幼稚園・小学校実習を通じて、私が最も難しいと感じ、かつもっと学び取りたいと思ったことは、子どもの“しつけ”だった。「先生、先生」と慕ってくる姿を見るにつけ、子どもたちは本当にかわいらしい。なんだか、自分が愛されている、頼りにされているように思えてきて、幸福感でいっぱいになる。そして、知らず知らずのうちに曖昧な態度をと

り、けじめを失いがちになっていた。きちんと話を聞くべき時なのに、なかなか落ち着いた雰囲気ができなかったり、担任の先生との約束で普段は許されていないことでも、私の前ではしようとしたりする事態があった。こうした場面に遭遇して初めて、かわいさだけで子どもをみていた自分の甘さに気がついた。子どもを愛し、丸ごと受けとめ温い目で見守るよう心がけることはもちろん大切であるに違いない。しかし、それと同時に厳しく、冷静な目をもって臨んでいなければ、子どもの将来を託された教師としてその責任はとて果たせない、と教えられた。これまで、理想の教師像はと問われると“信頼される教師”と簡単に口にしてきたが、子どもに好かれることは案外にたやすく、一方、真に信頼されることがどれほど大変なものかを考えさせられた実習で

あった。

小学校実習において、担任の先生に御事情があり十日ほど留守にされることがあったが、その際、本来なら実習生には体験できない仕事をさせていただくことになった。朝の会と帰りの会の進行、日記帳に言葉を添えること、連絡帳の点検などであるが、教師の務めを授業以外の面でも体験し、その喜びや苦勞を垣間見ることができたのは、望外の幸せだった。

今静かに日々を振り返ってみる時、実習生といえども、仮にも先生と呼ばれ子どもの前に立つことの責任の重さを思う。そして、人間を育てるという仕事の重大さと、すばらしさとを再認識している。そうしたことの契機となったこの教育実習は、私にとってとても実り多い、忘れ難い体験であった。

「昭和63年度教員養成学部学生合宿研修（秋季）を終えて」

実行委員長 藪 陽 介

学内の木の葉もすっかり色づき、北風に落葉する季節となりました。あの夏の立山合宿からもうずいぶん経ったような気がしています。

この教員養成学部学生合宿研修（秋季）は、教育学部学生全員が参加する、という意味で学部内の一大行事となっています。今回は合宿の目的として、(1)教育学部における教育内容をより充実させること、(2)集団的な教育諸活動の指導力を身につけること、(3)共同生活より相互啓発と連帯感の育成を図り、相互の親睦を深めること、(4)豊かな人間性の形成に寄与し、優れた資質の教員の養成を図ること、を掲げ行いました。

前期末試験に入る前に実行委員が選出され、その後の実行委員会で実行委員長なる大役を私が務めることとなったのでした。この合宿は目的に掲げた通り、将来教育現場に出た時の実際の指導力を身につけるためのものですから、企画・運営は学生を主体に行われます。そのため、今年の夏休みは実行委員にとって合宿研修の為の夏休みとなったわけです。

まずは各企画を決定することから始まりました。今年の企画は例年のものを参考にしながらも、一から練り直しました。その結果決定したものが、オリ

エンターリング・ディスカッション・自然観察・ミニ運動会・テント研修・野外炊飯・キャンプファイアー・クラフト、そして反省会の9企画です。企画が決定すると、委員が夫々の企画にはりつき、企画委員として各企画を担当しました。企画委員は各企画で集まり運営方法を煮詰めながら順次実行委員会を開き、各企画の進行状況の確認や問題点を話し合いました。又、研修場所である、国立立山少年自然の家へ実際に何度も足をはこび、職員の方々と打合せをしました。8月には事前研修として、実行委員と希望者で夏期合宿を呉羽少年自然の家で行いました。そこでは野外生活・宿泊学習などを指導者の立場から見るために職員の方達から講義及び実技を受けました。この呉羽合宿は実行委員の団結を深めるよいきっかけとなったように思います。

合宿の最初はオリエンターリングから始まりました。企画委員では、自然の家で行っている既成のコースに新たにポイントを付け加え、クイズもオリジナルなものを作り設置しました。コースはなかなかの難所が多く「全員長靴持参」という配慮がフルに活かされたようです。また、初日の夜はディスカッションと自然観察でした。ディスカッションでは議題を、

小・中学校での体罰や校則その他から一つ選択しました。日頃討論するという機会がないため、最初は意見も出にくかったようですが、後半は時間が足りないくらい白熱したものとなりました。自然観察では当初、星座観察となっていたのですが、生憎、曇天のため室内でスライドを用いながら講師の方に星の話をしていただきました。

2日目は今回新しく企画したミニ運動会を行いました。綱引き・リレーなど、小学生時代を懐かしみつつ熱中しました。わけでも野村学部長はじめ諸先生方の積極的な御参加を得て、大変に盛り上がった企画でした。また、例年であれば常設のテントで一泊していたものを、今回は自分たちの手でテントを張り宿泊しました（しかし、天候は雨模様から夜半には本降りとなり、雨中のテントで一夜を過ごすことになりましたが…）。さて、その雨の中、迷いに迷った上でキャンプファイアーを行ったのですが、企画委員その他多くの御協力で大成功を収めることができました。

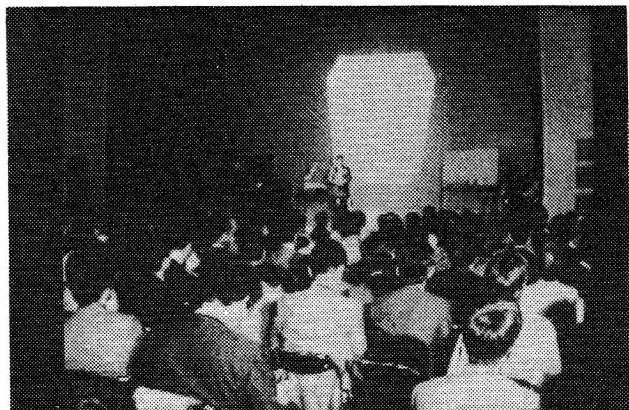
3日目（最終日）も雨が降り続いていましたが、

室内でクラフト（竹細工）製作を行いました。この竹は、先に、（またも土砂降りの日）企画委員と学務の方々との数名で200人分を直接切りに行き準備していたものでした。これで竹とんぼなどを作ったわけです。また、当初の計画通り、ポリ袋をつなげて熱気球を上げるというデモンストレーションも行いました。ドライヤーの熱であたためるのですが、体育館の天井まで上がったときは、どよめきと拍手が沸きおこりました。最後に各企画別に反省会を開き、3日間を締め括りました。

この3日間、同輩と寝食を共にできたことは、非常に大きな意味があることと思います。普段の学校生活では見えてこない様々な一面を互いの中に発見し、また、一人一人の心の中で何か考えることのあった三日間であったように思います。今回のこの合宿が、学生生活の忘れ得ない思い出の一つとなり、また、教師となった時に貴重な財産として働くことになれば、これに過ぎる幸せはない、と実行委員長としては思います。



応用物理学会学術講演会を終えて



超伝導会場（NHKニュースより）

1988年秋季第49回応用物理学会学術講演会

期 間： 10月4日（火）～7日（金）
会 場： 富山大学 ボルファートとやま
参加者数： 5,591名（延べ約 15,000名）
講演題数： 3,154題

この講演会は応用物理学会が主催する全国大会であり、北陸地区では福井に次いで7年ぶり、富山では初めての大会であった。

大会の参加者数は前回（名大）とほぼ同数であった。外国からの参加者も多数あった。講演題数はシンポジウム、受賞講演、一般講演合わせて3,154と秋季全国大会としては過去最高であった。ちなみに名大では2,813題であった。

光関連技術、半導体材料、高温超伝導体関連技術を中心に先端技術分野の最新の成果が発表され、活発な質疑応答が行われた。脚光を浴びている分野の最新の成果を概観するのに好都合なシンポジウムのテーマは次の10件で、合わせて74題の講演があった。

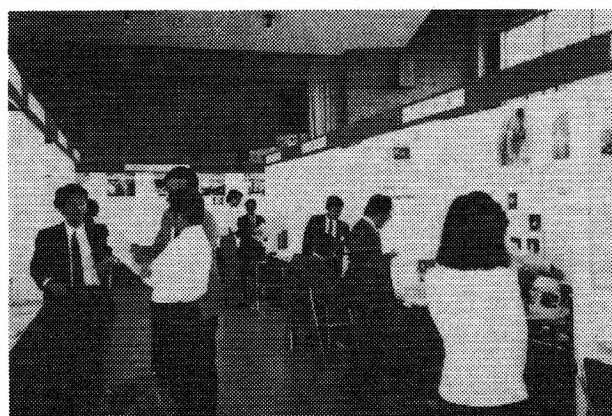
- ・気相成長 A L E（原子層エピタキシー）のメカニズム
- ・結晶欠陥の可視化技術
- ・金属-半導体 S i の界面形成と新しい評価法
- ・プロセスプラズマにおける磁界の応用
- ・酸化物高温超伝導開発の新しい展開

- ・半導体の原子尺度での制御と評価
- ・半導体の低温プロセス技術
- ・高機能有機材料・物性の精細制御の新展開
- ・分子超薄膜
- ・応用物理は地域社会に奉仕できるか

受賞講演は、論文賞2題（高温超伝導体の物理、ホット分子ビームエッチング技術）、奨励賞3題（横方向電流注入多重量子井戸レーザ、半導体超格子の熱的安定性-擬ポテンシャル法による解析、 K_2-NiF_4 型超伝導体）、会誌賞1題（希土類-鉄-ポロン磁石の保磁力）、計6題であった。

一般講演の分科別講演数は、放射線・プラズマ77、計測・制御45、光182、量子エレクトロニクス185、光エレクトロニクス278、薄膜・表面263、荷電ビーム応用244、応用物性76、超伝導292、有機分子・バイオエレクトロニクス96、半導体A（シリコン）388、半導体B（シリコン以外）330、結晶工学399、非晶質156、応用物理一般63、合計3,074題であった。A L EやM B E（分子線エピタキシー）を中心とした結晶成長技術、シリコンやIII-V族化合物半導体等の光通信材料・デバイス、高温超伝導材料等の先端技術部門の発表件数が多かった。また、12件のインフォーマルミーティングが行われた。

講演会の規模拡大に伴い、教養部と全学部合わせて31会場の他に、今回はじめてサテライト会場を設けることとし、超伝導部門の4会場をボルファート



展示会の様子

とやまに設定した。主会場の富山大学との間には参加者の移動用にシャトルバスを運行させたが、参加会員にとっても大会運営の面でも何かと面倒であった。しかし、ファクシミリ機能付き臨時直通電話で両会場間を結ぶことによって、大過なく終了することができた。黒田講堂が新しくなれば、このような問題は解消することになるだろう。

懇親会には300余名の参加を得て、ささやかながらも和やかに歓談が行われて好評であった。

この機会に富山県を観光される方々のために、各種の観光パンフレットを用意したところ好評であった。また、2日目午後の雨を除けば、好天に恵まれて、参加者には富山の自然環境の良さが印象強く残ったことであろう。ちょっと残念だったのは雪を載いた北アルプスを観ていただくには時季が少しばかり早かったことである。大会の期間は観光シーズン中でもあり、参加者の宿泊施設が確保できるか否かが最も気がかりであった。予め、業者には大会参加者用に宿を確保してもらい、期間中も、旅行案内窓口を設けて対応したが、案の定、当日申込者にとっては宿泊所の確保が困難で、一部の参加者には金沢の宿泊施設を利用していただく結果になった。さらに事前の予約者の中には小松で宿泊した人もあった。



正 門



懇 親 会

今後このような大会を本県で開催するに当たっては、開催時期と大会の規模について事前に十分検討する必要があるだろう。

この他に、講演会場の確保・割付け、アルバイトの割付け・予行、朝夕の交通手段の確保、交通案内、講演開始時刻の検討、参加会員の昼食の手配、臨時電話の設置、会場間連絡網の確保等々の規模が大きいために生ずる多くの問題も、委員長、副委員長以下、総務、会計、アルバイト、懇親会、展示会、受付の係毎に役割を分担して乗り切った。

本大会の実行に当たっては、富山県、富山市、富山技術開発財団からご援助を頂戴した。また、大会を準備し実行するに当たって、学内の関係部局の多くのかたがたに深いご理解とご協力を載いた。北陸支部の学会員29名（富山28名、石川1名）には実行委員としてご協力戴き、また、理学部と工学部の90余名の学生諸君には会場係や受付係として会の円滑な運営に協力戴き、大会を成功裡に終了することができた。

多謝。

(総務係女川記)

リーダー研修会を終えて

実行委員長 斉藤 祐一

体育系サークルリーダー研修会は、その目的を「課外活動のあり方や問題点について、分析検討し、本学体育系各部の発展に寄与するとともに、リーダーとしての資質の向上を図り、あわせてサークル相互の親睦を図る。」として、毎年学生部と体育会が行っています。

今年も昨年に続いて大山町の山野スポーツセンターに於て、10月4日（火）～6日（木）の2泊3日の日程で行いました。今回のリーダー研修会では、参加者にリーダーとしては勿論、スポーツ選手として必ず知るべき運動全般における初歩的・基本的分野から、実際のクラブ活動において役立つ知識の習得を目指しました。これは、各クラブに監督・コーチといった存在があまりみられないため、良きリーダーは、良きマネージャーでなくてはならないと思ったからです。そのため各クラブに多くの参加を呼びかけましたが、29クラブ58名の参加に終わりました。

さて、講演・講義は学外から2氏、学内から2氏を招いて行いました。まず社会保険高岡病院副院長の山田医師に「部位別のスポーツ外傷と障害」という題で、スライドを用いて、頸や肩など人間の身体の各部にみられる障害について説明していただきました。富山市民病院救急診療部主任部長の山野医師には「救急処置の概要」という題で、スライドを使い、頭部、胸部、腹部外傷について説明していただきました。学内からは、教育学部助教授の西川先生に「クラブ運営について」という題で、日頃、先生が体育系サークルについて感じておられることや、現在のスポーツ界に思っていることを話してもらい、教育学部講師の堀田先生には「トレーニングの原理と方法」という題で、トレーニング方法の種類、目的等について説明していただきました。

聞くだけでなく、自分で体感してもらおうと2つの実習を行いました。1つは堀田先生に「トレーニングの原理と方法」という題で、講演していただいたトレーニングを実際に行ってみました。もう1つは、ソニー企画に依頼し「テーピング」という題で、



西川助教授の講演

その説明を受け、足首や指に行ってみました。

講演・講義に加え、身近な先輩の経験談をリラックスした雰囲気に参加者に聞いてもらうために、硬式野球部コーチの五十里さんに学生発表会として話していただきました。彼のトレーニングに対する熱意が参加者に伝わったと思います。

次に討論会ですが、有効に討論を進めるため、参加者を6つのグループに分けて、テーマを「クラブにおけるリーダーシップ」として2回にわたり行いました。3回行った昨年より1回減ったわけですが、討論は活発なものとなり、積極的な意見交換ができたと思います。

全ての講演・講義、討論会の終わった夜、クラブ相互及び、体育会とクラブの親睦を図るため自由交換を行い、明日の体育会クラブのために語り合い、歌いました。

こうして、リーダー研修会は2泊3日の全日程を終了しましたが、研修会が意義のあったものであるかは今すぐには判断できません。しかし、参加者の皆さんには、今後のクラブ活動に少なからず良い影響を与えたのではないかと自負しています。

最後に、この研修会を行うにあたって、ご尽力していただいた学生部、体育教官の方々に感謝をして、挨拶と代えさせていただきます。

昭和63年度後学期専門移行者調

(63.10. 1付)

学部	入学年度 学 科		専門教育課程移行者数					移行不許 可者数	移行対象 者 数
			58	59	60	61	62		
人 文	人 文 学 科					2	86	12	100
	語 学 文 学 科					3	88	9	100
	計					5	174	21	200
教 育	小学校教員養成課程					1	137	2	140
	中学校教員養成課程					2	61	6	69
	養護学校教員養成課程					1	17	0	18
	幼稚園教員養成課程						26	0	26
	情報教育課程							—	—
	計					4	241	8	253
経 済	昼 間 主	経 済 学 科		1		8	122	30	161
		経 営 学 科		1	2	5	114	18	140
		経 営 法 学 科				8	90	20	118
		計		2	2	21	326	68	419
	夜 間 主	経 済 学 科						0	0
		経 営 学 科						3	3
		経 営 法 学 科				1		1	2
		計				1		4	5
理	数 学 学 科						36	12	48
	物 理 学 科					7	35	15	57
	化 学 学 科						38	6	44
	生 物 学 科					1	27	13	41
	地 球 科 学 科			1			24	15	40
	計			1		8	160	61	230
工	電 気 工 学 科				1	1	48	10	60
	工 業 化 学 科				1	1	37	20	59
	金 属 工 学 科					1	31	16	48
	機 械 工 学 科		1			5	39	18	63
	生 産 機 械 工 学 科				2	1	33	15	51
	化 学 工 学 科			1	2	2	32	19	56
	電 子 工 学 科				1	4	35	19	59
	計		1	1	7	15	255	117	396
合 計			1	4	9	54	1,156	279	1,503

昭和63年度後期授業料免除について

昭和63年度後期授業料の免除については、さきに開催された授業料等減免選考委員会の選考を経て、出題者643名（学部584名，大学院58名，専攻科1名）のうち，469名（学部432名，大学院37名）が全額免除を許可され，31名が不許可となり，残る143名（特別な事情2名，私費外国人5名，超過免除136名）

は，文部省へ申請することになった。

なお，授業料免除及び奨学金を希望する者で，不明な点があれば厚生課奨学係又は各学部の学務係（経済学部，教養部は学生係）において相談してください。

（参考） 前期授業料免除実施状況

区 分	出 願 者	許 可 者	不 許 可 者
学 部	611 名	524 名 (106)	87 名
大 学 院	70	64 (17)	6
専 攻 科	1	1	0
計	682	589 (123)	93

（ ）は半免で内数

◆◆◆◆ 交通事故について ◆◆◆◆

大学構内の自動車，バイクの氾濫は目に余るものがあり，正門入口附近から図書館の車道の両側さらには歩道を占領して駐車している現状である。

このような状況から，車の通行が困難であるのみならず，歩行者の安全が著しく阻害されており，報告された交通事故だけでも相当の数にのぼる。



第一グラウンドフェンスに転落





図書館前よりメインストリート

また、これからは冬季のため降雪等による交通事故の増加も心配されますので、自動車等を運転する

者は一人一人が交通ルールの遵守はもとより十分に注意し事故防止に力全を期するよう常に心掛けて下さい。



経済学部・人文学部前

***** 冬期の路上又は駐車場での自動車等の放置自粛について (お願い) *****

今年も降雪期を迎えましたが、構内道路、駐車場の除雪を例年どおり実施する予定です。特に本年は工事等で駐車場が狭隘となっており、又降雪も多いと予想されます。

ついては、路上又は駐車場での自動車等の放置は除雪作業の妨げとなり、他の通行の支障となるばかりでなく、放置自動車等への損傷の原因ともなりかねませんので、是非ともこのような路上又は駐車場での放置を慎んで、効率的に除雪作業ができるよう一層のご協力をお願いします。特に路上は、除雪の

ため危険な状況となり、さらに除雪のため道路が狭くなり人の歩行や自動車等の通行の妨げとなりますので除雪後も絶対駐車しないようお願いいたします。

なお、実験研究などで止むを得ず夜間から早期に亘り駐車場に駐車する必要がある場合は、予め、所属部局会計係等へ車番、駐車場所、所有者の氏名、所在及び内線電話番号などをご連絡の上その指示に従ってください。

全学の教職員、学生の皆さんのご協力をお願いします。

学生健康保険組合の医療費請求手続について

富山大学学生健康保険組合の組合員(加入者)は、医療費請求書に基づいて規約の定めるところにより医療費の給付を受けることができます。

最近5年間の年間平均利用者数は約700人で、これは組合員の13.5%に相当します。しかし、実際にはこれ以外に、加入者自身(昭和60年度以降の入学学生はほとんど全員加入)が加入していることを忘れていたり、あるいは、医療費請求の手続を知らなかったり、又、知っていても請求の手続を放置又は放棄してしまっている者もいると見受けられますので、これらの者を含めますとっと多くの利用者がある

のではないかと考えられます。

年額1,200円の組合費で年間45,000円(組合費700円の昭和59年度以前入学生は30,000円)までの医療費の給付を受けることができますので、僅かな医療費でも同制度を大いに利用され、医療費給付金の受領に不利益を被らないよう十分留意してください。

なお、本保険を利用する場合、医療費給付金の請求手続は規約細則第8条により、病気が治癒した日から1か月以内(治療が1か月以上にわたる病気の場合は1か月ごと)に医療費請求書を提出することになっていますので、所定の期間内に手続を行うこ

と並びに所定の期間内での手続を怠った場合又は忘れてしまっていたりした場合があっても、そのまま放置・放棄することなく、速やかに組合事務窓口

(保健管理センター内)又は学生部厚生課保健係へ相談してください。

昭和63年度学生健康保健組合予算並びに 昭和62年度学生健康保険組合決算について

このことについて、去る11月28日の理事会において次のとおり承認されましたのでお知らせします。

(1) 昭和63年度学生健康保険組合予算

<預り金>

収 入 の 部		支 出 の 部	
繰越預り金	9,760,700 円	運営費へ繰入金	6,732,800 円
新入生等組合費	7,266,000 円	返 還 金	120,000 円
		預 り 金	10,173,900 円
合 計	17,026,700 円	合 計	17,026,700 円

<運営費>

収 入 の 部		支 出 の 部	
前年度繰越金	5,136,828 円	医療費等給付金	5,000,000 円
昭和63年度預かり金より繰入れ金	6,732,800 円	事務運営費等	1,046,000 円
預 金 利 息	520,000 円	予 備 費	6,343,628 円
合 計	12,389,628 円	合 計	12,389,628 円

(2) 昭和62年度学生健康保険組合決算

<預り金>

収 入 の 部		支 出 の 部	
繰越預り金	8,702,400 円	運営費へ繰入金	5,820,300 円
新入生等組合費	6,980,600 円	返 還 金	102,000 円
		預 り 金	9,760,700 円
合 計	15,683,000 円	合 計	15,683,000 円

<運営費>

収入の部		支出の部	
前年度繰越金	3,566,353 円	医療費等給付金	4,261,562 円
昭和62年度預かり金より繰入れ金	5,820,300 円	事務運営費等	588,786 円
預金利息	600,523 円	翌年度繰越金	5,136,828 円
合計	9,987,176 円	合計	9,987,176 円

キャンパス樹木誌(5)

サザンカ (Camellia sasanqua Thunb) ツバキ科

暗雲垂れこめた冬空からときおり雪のちらつくこの頃、吐く息も白く手先がかじかむ。そんな寒空のもと、庭の片隅にそこだけささやかなアクセントのように、ひっそりと薄紅色の花を付けた植物がある。サザンカである。

サザンカはもともと九州、四国の丘陵地に自生するツバキ科の小喬木である。樹高はおよそ10mにまでなる。ツバキに似ているが、サザンカは葉が薄く小形である。また、ツバキが春に花を咲かせるのに対しサザンカは晩秋から初冬にかけて開花する。さらにツバキでは花びらが根もとでくっ付き合っているのに対しサザンカでは離れている。そのためツバキでは花全体がひとかたまりになって落ちるのに対しサザンカでは花びらがバラバラに散る。以上のような点からツバキと区別できる。

野性のサザンカは白色の花を付けるが、園芸的に品種改良されて、花色も白、薄紅、濃紅、しほりなどさまざまに変化し、花の大きさも小輪、中輪、大輪、八重咲など、数多くの園芸品種が作り出されている。日本のみならず最近では欧米でも広く栽培されている。

サザンカの学名を Camellia sasanqua という。今でもお年寄りにみられるように、かつてガをクァと発音していた。サザンカもかつてはサザンクァと書かれ、発音されていたが、それがそのまま学名(種名)として採用されたものである。

本学キャンパス内では正門門柱の左右に、理学部一号館前、教養部の中庭ほかところどころに植えられている。

教養部教授 小島 寛



サザンカ

<<<◀ 学園ニュース編集委員 ▶>>>

学生部長 瀧澤 弘
 人文学部 河村 貞枝
 " 山口 幸祐
 教育学部 呉羽 長
 " 原田 嘉昭
 経済学部 山崎 清
 " 相澤 吉晴

理学部 松本 賢一
 " 広岡 公夫
 工学部 島崎 長一郎
 " 杉本 益規
 教養部 高安 和子
 " 山本 孝一